

津軽のわた雪

齊藤 倫子 青森

シュトーレンに似てゐる丘とおもひ見つ雪甘やかにふはりと付きて
ほろほろとぼろんぼろんと手ぶくろに雪ふりシヨパンのワルツひきたし
ゆれながら回転しながらふるこれは『津軽』七つの雪の「わた雪」
毛糸帽かむるあたまはぬくぬくと春の土筆のことなどおもふ
雪景色のこの美しさなき冬をおもへばさみし地球温暖化

二十一時のATM

中津川 靱 坐 埼玉

気前よき兄貴のやうに札出せり二十一時のATMは
銀行に借りは無けれど風采の良き行員につい萎縮する
にほんごの名もあつたのだ堅物の（現金自動預け払い機）
（マイナカード）交付待つうち膝冷えて日向の小道選んでかへる
テレビにて面は見せる五人衆裏金つかふ裏顔みせぬ

母

宮内 博子 埼玉

朝の月すこし欠けたる日におもふ晩年といふながながき日々
みどりごのものにはあらぬ大ききの紙おむつ抱へ母を訪ふ
湯に浸かる母はおだやか畏るるはひれ伏すほどの乳房の浮力
たらちねの母の乳房と春の月しろいまあるい永久に尊い
母の機嫌すこぶるよろしハミングのワルツただしく三拍子なす

十本のゆび

伊 沢 玲 千葉

「さざんか座」と言ふ息しろし冴えわたる空に自作の星座をさがし
月読のうさぎの耳に近寄りて「初めまして」と降り立つSLIM
月からも見えてゐるはず停戦を祈りて組める十本のゆび
戦闘機なかりし世紀の青天に帰らんとして風花ながる
天才の知恵と狂気が受け継がれヒトの歴史は兵器の歴史

世界を信ず

斎 藤 美 衣 神奈川

ゆふやけの窓にかけられ茶の背広かすか腕上げものおもひする
わたしからとほく離れたたましひがさいごに照つて没いひ日落ちたり
いさかひの最中きのふしまひたる絹ごし豆腐の角の欠けたり
真夜中の流しのまへで飲むみづはぎんの音せり 雨の降り継ぐ
右足のいつもほどける靴紐を結びなほして世界を信ず

父

岩 崎 佑 太 東京

サボテンに水やりながらこの冬はからだ肥えつつこころ痩せたり
カリフラワ―のやうにあかるくわらひにき父はその死の一ヶ月前
やまぬ雨ながめつくして暮れる日の夜は羅うすもののごとくやさしき
憎しみの凍り果てたる雪の夜は鏡を出入りして父とあふ
よごれつつとけのこりゐるしらゆきのごとき飢ゑあり父の晩年

小舟にひとり

横山裕子 富山

独り居に冬ごもりする心もち人には告げずましてや子には
家庭とふ船の楫取り担ひたる月日は去りて小舟にひとり
純なりし昭和の杳き青春がほのかに灯る寒夜のむねに
この星の混迷をはるか隔てたる冬の星座のさやけきひかり
神話では不運な狩人オリオンが王者の氣韻に凍て空を統ぶ

ノンストップで

斉藤淳子 長野

空晴れてゲレンデに白き雪あればわれ迷ひなし 滑走に入る
スカイブルーとスノーホワイト分けながらノンストップで滑りぬけたい
割引のクーポンで買ふ恵方巻グッドラックも割引かれるや
暖冬に水さすやうに寒波きて化石燃料はげしく燃やす
バチバチと身のあちこちで闘ひが始まる全身筋肉痛なり

猪名川

中西正博 兵庫

澄みきつた水がゆつくり流れゐてセキレイのとぶ冬の猪名川^{みながは}
かをりたつ蠟梅と水仙のあはひにて静かに咲きゐる白き山茶花
ゆるやかな流れを遡上する鴨ら消えゆく水脈をひきつつ泳ぐ
鉄柵にもたれ白梅を見るひとあり近づきゆきことばを交はず
年とりてこれが最後といふ妻の市民合唱ヘンデル「メサイア」

子の除籍

島本 敏子 奈良

「まもらねば」その一念の五十余年護られぬしはわれかもしれず
子の除籍手続きに来し市役所のへお悔みコーナーへ椅子二つあり
子のゐなくなりにし部屋の棚に置くCDの背がときをりひかる
雪柳の枝先に咲く白い花春立つ朝のひかりをまとう
ふるさとのネコヤナギそろそろふくらみて川面に銀の影うつりゐむ

気合を入れて

木戸 博 恵 広島

立春の翌日はもう雛あられ売り場にならぶスーパー逞し
わが古稀を祝ひてくれる友らゐて支払ひ割り勘これまた嬉し
詠草の年齢欄の十の位ひとつ足したり気合を入れて
記憶力維持を助くといふサプリ買ひてけふまた飲み忘れたり
死してなほ駅に役所に貼られあり人を殺めし男のポスター

ため息

池田 毅 福岡

金、気力、体力すべて余裕なし日々生きるのがやつとなんです
消費税十パーセント加算され財布の中の金が足りない
しつかりと我の手元が撮られをりセルフレジにはカメラがありて
「そんならいよかやないすか」大らかさ失くした日本でため息をつく
暁に我が作りしおにぎりを息子は食べて被災地へゆく